

会 議 要 旨 書

会議名	第3期三鷹市生涯学習審議会第7回定例会 第32期三鷹市社会教育委員会第7回定例会
日 時	令和5年2月15日(水) 18時30分～20時30分
場 所	三鷹市生涯学習センターホール
出席委員 (17人)	田中雅文 矢崎喜美子 齋藤智志 青木玲子 生田美秋 鎮目司 倉田清子 小林七子 佐伯友 和田光広 進邦徹夫 高橋伸 並木茂男 今村範子 太田みつこ 江口聡 遠藤弘子
欠席委員 (3人)	廣瀬圭子 鈴木弘七 富澤昌人
行政職員 (6人)	スポーツと文化部長 大朝摂子 スポーツと文化部調整担当部長・生涯学習課長 高松真也 生涯学習課主査 下原裕司 同主査 三内紀子 同主任 中西崇郎 同主事 齊藤満里奈
会議の公開・ 非公開	公開
傍聴人数	3人
<p>1 開会 (開会に先立ち、事務局より委員の出席状況、傍聴者の有無、会議要旨の公開について報告し、配付資料の確認を行った。)</p> <p>2 議題 (1) 「三鷹市生涯学習審議会・三鷹市社会教育委員会意見の骨子案について」 【スポーツと文化部調整担当部長】意見書の作成及び今後の流れ、骨子案の構成について説明する。 意見書の策定までに、本日を含めてあと2回、審議会の開催を予定している。本日の審議会では、意見書の骨子案について、皆様で共有及びご議論をいただきたいと思う。次回、4月の審議会において、意見書の最終案についてご確認いただき、正副会長ともご相談のうえで、意見書を確定するという流れで考えている。 意見書の骨子案は、「はじめに」「第1章～第4章」「まとめ」という構成になっている。「はじめに」には、生涯学習審議会及び社会教育委員会議の位置づけや構成及びコロナ禍を経て新しい生活様式に対応した生涯学習・社会教育について、4つの分科会に分かれて議論を行ってきた経過などを記載する予定である。「第1章～第4章」については、各分科会でまとめたいただいた内容を掲載しており、おおむね分科会のテーマや位置づけ、現状と課題、意見・提案というような内容を記載していただくイメージで構成を考えている。最後の「まとめ」については、各章を構成する各分科会の意見・提案を踏まえて、今後、正副会長とも相談しながら作</p>	

成していく。

【会長】続いて、第1章から第4章の報告について、各分科会よりご報告をお願いしたい。

●第1章「学びと活動の循環」

【A委員】本分科会の中核テーマは「自己実現から地域貢献へ」及び「需給融合型の学習活動」である。これらは、今回の意見書の全体を枠組みづける項目であり、本分科会の意見は全体の総論という位置づけになると思う。また、共通項目の中で特に重要なのは、情報発信(広報)とコーディネート機能であると考えた。さらに、それらの事項を考えるにあたっては、令和元年に提出された意見書の取組状況の検証が必要であり、それに基づいて次のステップを考えるというのが有効であると思い、そのような観点から次のようにまとめた。

本分科会では、学びの段階をビギナー、ジュニア、シニアという3つに分類して検討を進めた。これは年齢ではなく、学びの段階に基づいた名称である。ビギナーは学びの場や循環への参入がまず求められる人たちであり、ジュニアはそれなりに学びが始まっており、次はクオリティの向上が求められる人である。シニアはさらに一歩進んで、地域貢献や講師、コーディネーターの人財となってくれる人である。また、それぞれの段階における課題のレベルと内容について、ジュニアの領域のコンテンツが一番充実していると考えられる。そのため、ビギナー及びシニアの領域における課題が、高いレベルであると考えた。

シニアに関しては、自分の学びをさらに地域貢献に持って行くというところに、大きな1つのハードルがあると考えられる。そこで、それぞれ段階ごとに詳細な課題をまずは洗い出したうえで、どう対応するかということを考えていかなければならない。

ビギナーは、まずはいかに学びの循環に入ってもらおうかということが一番大事である。この層に働きかけ、学習者のベースを豊かにしていかないと、質、量ともに生涯学習の大きな広がりを見込めない。まずベースを広げることが必要である。

ジュニアは、三鷹市の実践を見ると一番充実している層であると考えている。

シニアは、生涯学習の学習者の中で、自分たちが地域を担うという意識を持って学習に参加している人たちのことであるが、そのような人は少数だろうと思う。「自己実現から地域貢献へ」という目標を立てているが、この「から」のハードルが非常に高いのではないかと思う。そのため、そこをいかに超えるかということが、課題になってくるだろうと思う。

次に、コーディネート機能に求められるものについてである。コーディネート機能の重要性については、本審議会でもこれまでに議論されてきたことである。そこで、今求められるのは、コーディネート機能の実質化ということだろうと思う。そのために必要なのが、コーディネート機能の見える化、集約化、気軽化(ユーザーフレンドリー化)及びコーディネーターからの一歩踏み込んだ強い発信であると、本分科会では位置づけた。どこにアクセスしていいかわからないと、そこで諦めてしまうことがあるため、まずこの部分のハードルを下げ、生涯学習に関心がある人をいかにつなぐかということが重要になってくる。対応例としては、コーディネーター一覧や、コーディネートの機能を持っている部署一覧といったものを作り、ホームページのトップページの目立つ箇所にその入り口を置く。さらに、コーディネート機能からの一歩踏み込んだ発信として、例えば、提供できるコンテンツ情報を、文字だけでなく、動画などで発信し、具体的に見える形にしないと、ハードルはなかなか下がらないと思う。そして、コー

ディネーターが様々な仕掛けの中核として機能しなければならないと考える。

続いて、情報発信に求められるものである。これもやはり、まずは学びの段階に応じた情報発信が必要である。そのためには、SNSの積極的な活用が不可欠である。そこで、このようなことを具体的にするためには、全体を取りまとめるような情報発信コーディネーターといった位置づけが必要になってくる。

最後に、前回の意見書の取組状況の検証を行った。この意見書には、三鷹市の生涯学習が進むべき方向性が明確に示されている。そうであれば、次の課題はその実質化である。そうした観点と、本分科会での意見に基づいて、前回の意見書の取組状況を検証した。その結果、ほとんどのものは結局、コーディネート機能がきちんとうまく働いているのかという点や、様々な部署で様々な事業をやっているが、それらはつながっているのかという点に関する疑問であった。こちらについては、きちんと連携がなされているものもあれば、これから検討するというものもあるということがわかった。なので、これから検討するという部分を、今後さらに進めていただきたいと思う。まとめれば、点としての活動を、面的広がりにするというのが課題であるという結論に至った。

●第2章「スクール・コミュニティ」

【副会長】スクール・コミュニティの実現というのは、三鷹市生涯学習プラン 2022 や三鷹市教育ビジョン 2022 の目標達成を形づくっていくものである。例えば、三鷹市生涯学習プラン 2022 において、三鷹市が全国に先駆けて取り組んできているコミュニティ・スクールという学校の仕組みは、この目標の実現と推進の核となって、さらにその仕組みの発展が地域全体の学びと活動の循環をつくり出していくときに、スクール・コミュニティがおのずとそこに現れてくるという方向性が示されている。また、三鷹市教育ビジョン 2022 においても、三鷹市の学校の仕組みというのは、子どもたちが学ぶ場から、さらに発展させて、地域ぐるみで学ぶ場として、学校をより豊かに、多様に活用していこうという取組がスクール・コミュニティという考え方であるとされている。学校が学びの原点であるとするれば、スクール・コミュニティをその場で作っていくことは、生涯学習そのものであるといえると思う。学校を地域の拠点であるプラットフォームとして、地域の人財が交流・循環していく、学校を核としたコミュニティづくり、すなわちスクール・コミュニティの創造に向けた取組が今後の課題であると、三鷹市教育ビジョン 2022 では述べられている。まさにこの課題の遂行が生涯学習の拠点づくりと重なっていくであろうという観点から、本分科会の意見、提案をさせていただく。さらに、三鷹市では、スクール・コミュニティの核は学校3部制にあるということを新たに掲げている。学校3部制を推進していくことで、スクール・コミュニティの実現に近づいていくだろうということで、本分科会の趣旨は、結論的に学校3部制の推進にあると考えている。学校3部制では、第1部が学校教育の場、第2部が多様で豊かな「新しい放課後」としての学びの場・遊びの場、第3部が生涯学習・スポーツなどの身近な大人の遊び場・集いの場とされている。生涯学習・社会教育の観点からの提言としては、主に第2部に関する提言が中心となる。そこで、第2部における連携の不十分さや、部活動の問題点などを明らかにするとともに、部活動の様々な見直し、その具体的な提案をまとめとして述べることにした。

多様性豊かな新しい放課後づくりを目指すために、垣根を超えた取組の可能性というのがこ

ここにはあるだろうと思う。ここにおける具体的な好例として、地域子どもクラブなどを具体的に紹介しながら、この垣根を超えた取組の可能性を、第2部における現状として述べる。中学校の部活動についてのいくつかの問題点が、今この第2部の時間帯においては一番大きな課題としてあるという現状把握に基づいて、中学校の部活動についての見直し、それについての各委員からの具体的で前向きな意見の交換がなされた。例えば、中学校の部活動参加のハードルをもっと下げたい、部活動への参加を必須とせず、行きたいときに行く、帰りたいときに帰るなど、部活動というより、公園での遊び場の延長のような緩いやり方でもよいのではないかという考え方も提案されている。ユニフォームなどの統一を必要最小限にとどめ、親の経済的な負担を下げたいというのは、市民目線からの意見である。しかし、それをやめられずにいるという具体的な問題点なども議論された。それを踏まえて、もう少しそこを緩やかに考えていけるといいのではないかという提案である。また、複数の部を兼務できるようにするということも考えられるのではないかという提案もあった。さらに、学校活動を超えた地域の活動としての新しい部活動の在り方に対する行政の取組について、スピード感を持って取り組んでほしいという要望も出された。そうした部活動と新たな放課後作りとの連携を志向していくためには、地域の関係団体との連携というのが非常に大きなサポートになっていくかと思う。そこで、三鷹市の体育協会やスポーツ指導員などが、中学校の部活動にどのように協力できるかということを提言できるのではないかと考えている。保健体育の授業や、運動部活動などにおける三鷹市体育協会やスポーツ人財の外部指導者の活用などが望まれるのではないかと。

学校3部制の推進において、第3部に関しては、どこまで推進を進めていくべきなのか、本分科会では疑問点が提示された。第3部は、放課後の時間帯後の活動になるので、その第3部における地域発信の活動が、果たして学校施設の開放という点における安全管理や、日常の子どもたちの学習環境の保全という点において、不安が残る状況ではないかと思う。また、学校施設の地域開放が、市民のニーズに合っているのかどうかという点においても、まだ確実なデータとしては提起されていない状況ではないかと思う。さらには、三鷹市の公共施設の充実度を考え合わせると、学校施設の利用の利点や、利便性などに勝る活動に学校施設を利用するのが限定されてくるのではないだろうかということも予想される。保護者同伴の子ども、青年や学生、高齢者など、多世代の交流が生まれる可能性は予想できる。しかし、第3部について、現時点ではスピード感を求める必要はないのではないかというのが本分科会での見解である。

最後に、今すべきこと、できること、それから課題について述べている。必要なのは、まず行動することである。行動することに学びがあり、行動することでつながりができていく。そこで大事なのは、何を学んで、何に向かって学んでいこうとしているのかという、共有感や共通認識というのがまさにビジョンである。そういう意味でのビジョンの共有感を持った上での行動、それは小さくても、多様で多彩な活動を進めていくこと、対面でのコミュニケーションというものを大事にしながら、その活動を進めていくことなどが、スクール・コミュニティの推進においては大事な観点としてあるのではないかと思う。課題としては、生涯学習の学びの循環や、地域の連携をもっと行うようにするには、どうしていったらよいのかと、その推進の具体的な取組や、それに対しての対策などについてどのように対応できるのか、どのような課題の解消が可能であるのか、そのあたりを具体的に提言できればと思う。

●第3章「人生100年時代（子どもから大人まで）」

【B委員】本分科会では、人生100年時代において、全ての人が生涯にわたる学習を通して充実した人生を送ることができる社会の実現を目指すべく、子どもから大人まで、全世代に目を向けて議論を進めてきた。その中で、人生100年時代に関する内閣府の見解を踏まえつつ、三鷹市の現状と課題を抽出した。その際、三鷹市に限定することなく広く社会的にも顕在化している共通課題があるのではないかとといった視点で議論を進めてきた。その結果、三鷹市ではコミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育による学校教育の充実をいち早く実践し、様々な成果や実績を残しているものの、生涯学習というより広い枠組みで見ると、現時点では十分とは言えず、次の時代に求められるものとして、次の2つの課題を抽出した。

1点目は、学校からいったん離れた人が個々のタイミングで学び直し、そこで得た知識や技術をまた仕事で発揮し、必要な能力を磨き続けるリカレント教育のプログラムを充実させる必要があるのではないかとということである。

2点目は、近年、コロナ禍における親のストレスなどによる子どもの虐待や、子育てへの過干渉が市内でも問題になっていることから、子どもを守り、親としての自己肯定感を育むことができるペアレンティングプログラムの実施が急務であるということである。

「意見と提案」については、抽出した現状と課題を中心に、現行の三鷹市生涯学習プラン2022（第2次改定）の章立てなどを参考とし、「ライフステージ別学習機会の提供」「まちづくりに資する人財の育成及び活動の場の提供」「保育付き（介護付き）講座等の充実」「情報の提供」の4項目に焦点を当てることとした。

「ライフステージ別学習機会の提供」として、20歳代から60歳代の働く世代を対象としたリカレント教育の充実や、50歳代から60歳代を対象とした介護教育の実施など、時代のニーズに合った講座の実施を提案している。

「まちづくりに資する人財の育成及び活動の場の提供」として、次世代の育成のためにも、子どもや若い世代にも興味を持てるような、参加しやすい活動の在り方の検討とともに、三鷹市が令和4年12月から試行運用を開始している「みたか地域ポイント」事業の活用を提案した。「みたか地域ポイント」では、ボランティア活動で得た地域ポイントを市内の生涯学習施設等で利用できることから、「学びと活動の循環」を推進するため、今後の本格運用に向けて、市民ニーズに合った講座やイベント等を提供するべきであると提案している。

「保育付き（介護付き）講座等の充実」として、先ほどのペアレンティングプログラムをはじめとする子育て世代向けの講座を実施する際に、保育付きの講座として実施することや、また、近年社会問題となっているケアラーへの支援として、介護付き講座の実施や、ケアラーが地域との交流を持つ機会の創出を提案している。

「情報の提供」として、これまでの伝えるための情報発信から、伝わる情報発信へと改善するため、これまで以上に各種媒体を活用した情報発信を行うとともに、三鷹市内で実施される講座やイベントなどの情報を一元的に管理し、利用者がいつでも自分に必要な情報にたどり着けるよう、市が中心となり、関係機関や団体等と連携を図るべきであると提案している。

最後に、三鷹市生涯学習プラン2022（第2次改定）の改定に向けて整理すべき項目を記載している。こちらは、本分科会で議論を進める中で、令和6年度に予定されている計画改定に向

けて、同時並行的に整理することが望ましいという意見が複数あったものをまとめている。

1点目は、現在提供している講座等のコンテンツの点検と見直しである。特に、長年継続をしている講座などでは、当初に設定した講座の対象年齢をはじめ、目的や難易度がこの間の社会情勢の変化に対応できていないケースもあるため、一定の頻度で点検や見直しを行うべきとするものである。

2点目は、ポストコロナ時代への適切な対応である。例えば、急速に普及が進んでいるオンライン講座や、対面、オンラインのハイブリッド講座などを実施する際には、オンラインの特徴や注意点、活用方法など、最新情報を随時アナウンスするなど、学習者がより効果的、かつ効率的に学習するための工夫が必要だと考える。また、コロナ禍でやむなく活動を中止している地域での学びの活動を立て直すため、行政による集中的な支援が必要だと考える。

3点目は、コロナ禍に伴い、近年、特に若い世代の自己肯定感が低いという社会状況を踏まえたものである。生涯学習を通じて自らの人生を充実した豊かなものとしてもらうため、講師が一方向的に教えるのではなく、参加者全員が当事者という意識を持ち、互いに教え合うことで、受講生の自己肯定感を上げるようなプログラムを提供できるとよいというものである。

●第4章「新たなコミュニティ」

【C委員】本分科会では、テーマを「新たなコミュニティの「学び」で創出する 住み続けたいまち・三鷹」と位置付けた。地域コミュニティの役割は、福祉、防災、子育て、教育の4つに分かれる。本分科会としての提案は、そのうちの教育・学習分野を中心に、「学びと活動の循環」による新たなコミュニティの活性化という趣旨の提案である。そして、基本となるのは、文化や趣味、スポーツなどの学びと、学びを地域に還元していくサイクルである。「学びと活動の循環」が市民一人ひとりを輝かせ、住民、地域のコミュニティを活性化させるという基本的な考え方で組み立てている。

三鷹市では、庁内にコミュニティ創生課を設けて、コミュニティ政策の推進を図っている。令和4年4月には、「これからのコミュニティの在り方に関する基本的な考え方」をまとめ、今後、コミュニティ創生基本方針を策定予定とのことであり、コミュニティ創生に関して、三鷹市は最も先進的な取組を行っている自治体の1つである。

三鷹市は、地域におけるコミュニティ活動を先進的に実施しており、その核となっているのが、住民自身による運営や企画であると思う。三鷹市では、コミュニティ・センターを拠点とした新たなコミュニティづくりに取り組んできた。コミュニティの原則には、自助、共助、公助があると言われてきたが、東日本大震災以降、近場の人、近隣の人たちの絆に基づく「近助」が大切であると言われている。その「近助」の拠点となるのが、市内7か所のコミュニティ・センターである。

次に、顔の見える「小さなサークル活動」を大切にする新たなコミュニティづくりについて記載している。サークル活動、あるいは学びの機会はたくさんあるが、身近なコミュニティを拠点とした自主的なサークル、小さなサークル活動での顔の見える日常的な学びが、強い絆を生み、学習だけではなく、地域の福祉や防災、子育て支援など、地域課題の解決に貢献するのであると思う。学習というものを、狭いレベルで捉えるのではなく、趣味や教養、スポーツ、あるいは学び直しであるリカレント、そういうものを含めて非常に広い範囲で捉えて、学習と

いうものが学ぶだけではなくて、楽しみながらやるということが大事であると思う。

次に、「学びと活動の循環」による新たなコミュニティづくりである。生涯学習講座は、学びが個人に蓄積されるだけにとどまる傾向がある。その個人に蓄積されたものや、その輪が広がり、地域に還元されていき、地域が一体となってよくなっていくような循環になっていかないといけないと思う。経験や知識を地域に還元し、新たな価値を生み出して、コミュニティの形成、発展につなげる、これが「学びと活動の循環」である。そこで、次のように具体的な提案をする。

1つ目、コミュニティ・センターを拠点とした生涯学習事業・活動の充実についてである。まずは、住民協議会を活性化させることが大切である。三鷹市では、あらゆる面で住民協議会が自主的にやるというスタイルをとっている。住民協議会では、事業や活動の企画、運営を行っているが、他市と同様に担い手の高齢化など、様々な課題を抱えているのが現状である。

2つ目、生涯学習の面から住民協議会運営の見直しをするということである。そのために、住民協議会における情報交換をする機会を設け、他市でやっているような実例を紹介するなど、積極的に支援、応援をしていくことが大切である。第3分科会の報告にもあったが、ホームページや地域紙など、情報面については、ある程度統一した方がよいし、そのことによって市民が、他の地域の活動や課題を知ることができる。

3つ目、生涯学習の面から住民協議会を活性化するということである。市民協働センターでは、「まち活塾」を実施し、コミュニティを活性化するための人材養成を行っている。また、杏林大学でもそのような講座を開催して、生涯学習の講座の1つとして実施している。しかし、その人たちが本当に地域などで活躍しているのか、活躍できる仕組みになっているのかが課題である。

4つ目、事業、活動の改善についてである。第1分科会で報告のあった、学びの段階におけるビギナー・ジュニア・シニアという考え方はとても重要だと思うが、それと同時に世代別に見ていくということや、趣味や教養、スポーツも含めて、横のつながりを見ていく必要がコミュニティの場合はあると思う。例えば、高齢者の対象事業である「むらさき学苑」を、コミュニティ・センターやオンラインで受講できるようになれば、市民はより身近に学習することができ、より多くの市民が受講できるようになると思う。若年層については、リカレントとスキルアップについて検討していくことが必要である。それから、子育てを対象とした事業についても考えなくてはならない。また、小さなサークルの支援事業として、会員募集や会の紹介をもっと丁寧にやる必要があるだろうと思う。

三鷹市のコミュニティは、庁内の様々な部署や外郭団体が関わっている。それぞれの部署で様々な事業を行っているが、その連携や情報を発信する仕組みが弱いと感じる。

最後に、7つのコミュニティ・スクールを基盤としたスクール・コミュニティの推進である。生涯学習センターやコミュニティ・センターだけではなく、スクール・コミュニティも1つのコミュニティ推進の拠点になり得るのではないかとと思う。

また、三鷹市は民学産公の協働に関しても先進的な活動を行っている。当初から、コミュニティ・ビジネスやソーシャルビジネス、NPO活動の支援に重心を置いていて、一定の成果をあげている。これからは、それに加えてリカレント教育や若年層のスキルアップ講座、就職支

援などについて、三鷹市全体の中で議論をしていくことが重要となってくる。リカレント教育やスキルアップ講座については、市だけではなく、学校や民間団体との連携をさらに強力で推進していかないといけない。

【会長】各分科会からの報告を受けて、何かご意見やご質問はあるか。

【A委員】第2分科会のスクール・コミュニティについて、中学校の部活動における外部指導者というのはコーチなのか、それとも教員の役割を担っているのか、その辺りのイメージを伺いたい。部活動を学校でやるというのは、学校教育の一環という理念があるのだと思う。学校教育の一環だから、教員がその指導に回るということになるし、学校の施設を使ってやるということにもなる。仮に外部指導者がコーチであるということになると、部活動を学校でやるということの必然性が薄れてくると思う。コーチや外部指導者にお任せとなると、外部指導者の考え方によって、いろいろな指導の仕方が出てくると思う。勝つことが大事であるという指導者も出てくるかもしれない。しかし、そうすると、先ほどの報告にあった、なるべく緩くやろうという理念とは反することになる。なので、そういったこともすべて理解したうえでの指導者を育成するということも、必要になってくるかもしれない。

【副会長】今、学校の部活動は変わりつつあり、学校が変えるのではなく、保護者や地域の方からも様々な発想が提案されている。部活動を学校の主体ではなくて、中学生や指導者、先生もサポートに入って、より多様な放課後の新たな第2部の時間帯にしようとしている。分科会として報告した意見は、保護者目線からのこれまでの部活動の問題点を解消していく、そういう新しい発想を盛り込んだ意見となっている。それぞれの中学生のニーズに合わせた、多様な部活動など、第2部での体力的な活動をやっていくことについて、今回の学校3部制の中にその可能性を盛り込めるのではないかと考えている。

【D委員】先生の中には、部活動の顧問をやりたくて先生になった方もいるはずである。そういった方の気持ちもきちんと汲みながら、外部に委託するというやり方との落とし所を見つけていかないといけない。また、保護者の中にも様々な意見があると思う。ユニフォームを統一しなくても良いと考える保護者と、統一した方が良いと考える保護者がいる。そういった理念的なところと、現実的なところにおいて、相反する問題があるというのは十分理解しているので、その辺も参考にしながら、今後も議論を進めていきたい。

【C委員】三鷹市における現在の取組状況について、どこまで検証をするべきなのか。

【スポーツと文化部調整担当部長】第4分科会「新たなコミュニティ」でご議論いただいている中で、コミュニティ創生課から資料の提供や質問への回答を得て、分科会のメンバーの皆さんと共有させていただいた。報告書の内容についても、コミュニティ創生課等、関係部署に現状の確認をしながら、最終案のまとめをしていただければと思っている。

【E委員】市内7つの住民協議会において、それぞれ様々な課題を抱えている。地域によって異なる課題もあるが、全体を通して言えるのは、住民協議会の活動を継承していく人財についてである。地域活動を継承及び循環していくための学びがあると、とても良いと思う。

第2分科会「スクール・コミュニティ」について、小学校に入るまでは、コミュニティ・スクールやスクール・コミュニティという言葉知らない保護者がとても多いので、幼稚園や保育園に通う子どもたちや保護者が、何か参加できるような仕組みがあると良いと思う。

【F委員】これまで、本審議会においてコミュニティ・センターを生涯学習の視点で取り上げてきたことはあるのか。三鷹市では、住民がコミュニティ・センターを運営しているが、生涯学習は住民の自治だけでうまく回るものではないので、行政の支援がないと、なかなか生涯学習の拠点にはならないと思う。

学校3部制について、第3部の部分が地域の方たちの集まりの場になると、住民協議会とのすみ分けが難しいのではないか。

他市では、公民館機能を持った施設のブランチャが学校の中にあり、そこで行政も一緒に生涯学習を展開している事例もある。そのように、コミュニティ・センターと学校がうまく融合していければよいと思う。

【スポーツと文化部長】コミュニティ行政、そして住民協議会の活動の大きな枠組みとしては、生涯学習や生涯スポーツ、防災などが理念的に考えられてきたという歴史がある。それぞれの地域でそれぞれに適した活動が同時並行的に育っていくものであり、7住区でそれぞれ違う発展をしてきている。

学校3部制については、現在、教育部を中心に議論を行っており、第3部をどこが主体でやっていくのかなどは、検討中である。

【会長】生涯学習を最も広い概念で捉えたとき、コミュニティ・センターを生涯学習の場として考えていくのは大切なことである。三鷹市において、生涯学習及び社会教育行政が教育委員会から一般行政に移行したことは、1つのとても大きな転機であった。社会教育は、もともと一般行政が持っている地域づくりの活動とすごく密接であり、一般行政に移ったからこそ、連携をとりやすくなる。つまり、生涯学習を広い概念で捉えて、一般行政のあらゆる部門でそれに取り組むという考え方でよいと思う。

学校3部制との関係でも、人々の学びの場は多様にあつたほうが選択できるので、コミュニティ・センターだけではなく、学校でも生涯学習に取り組むという考え方でよいと思う。

第1分科会「学びと活動の循環」について、学びを中心に考えると、ビギナー、ジュニア、シニアとなるわけだが、一方で地域活動をやっている方が、活動の中で学びが必要になってきて、学びの場に入っていくという逆ルートもあると思うので、そこにも焦点を当てて検討いただければと思う。

第2分科会「スクール・コミュニティ」について、部活動中心ということなのかもしれないが、学校を核としたコミュニティや地域づくり、子どもを核とした地域づくりを考えたときに、第1部の中でも、ゲストティーチャーを呼ぶなど、地域と学校が連携して事業をやっていくことで、社会に開かれた教育課程が実現できるのではないかと思う。

第3分科会「人生100年時代（子どもから大人まで）」について、このテーマは基本的なことで、かなり総合的な内容であるので、このテーマを意見書の第1章に記載するなど、「章」の構成について今後検討の余地があるかと思う。

(2) 「三鷹市生涯学習審議会・三鷹市社会教育委員会議の意見」の策定に向けた分科会ごとの議論について

(分科会ごとに、意見書の策定に向けて議論を行った。)

3 報告

東京都市町村社会教育委員連絡協議会の定期総会が、令和5年4月15日（土）午後1時から昭島市で開催される。

4 その他

今回は、令和5年4月21日（金）午後6時30分から、生涯学習センターで開催予定である。

—閉会—